

やさしい民話

# とんち彦一ばなし



提供：吉住酸素工業株式会社

## 第1話 トンさんの行列

---



野上のベッピン狐に痛い目を見せてやろう、と考えていた彦一が、トンさんの行列が明日あるこっぱ聞いて、狐に化かしくらべを申し出た。約束の時刻に、萩原堤の松の枝にのっていた狐が、下を通りかかった行列の見事さに

「えーぞ、えーぞ彦一ちゃん、むごう上手ね。」と大声ばあげた。

そーば聞いた供人達は、大勢で追いかけて、まちっとでやりでさしころそうした。さすがのベッピン狐も、当分の間、穴か

らチラッとも出来らんだっただけな。

## 第2話 困った米

---

狐がいつ仕返しばしゅうかとたくらんでおるげな。と聞いた彦一は、師走の支払いにキュウキュウしとった時ではあるし、朝、暗い中に家の前の往還に、米びつの米ばずーっとこぼしておいて夜のひきあけに、

「朝からコギャン散らきゃあて困ったもん、小川通いの荷車ヤツだろ。あした落ちとるならどぎゃんしゅう……………」  
』と言うてはわきよせた。

そるば聞いとった狐は、翌朝、うんと米ばこぼしといたげな。こらあ困った、と言いながら彦一は十日もつづけてはわきよせたので、よか正月どんば迎えたげな。



### 第3話 宇土のスグルワラ

---



「宇土のスグルワラ」ていうち、珍しゅう化け上手の狐が、宇土におったげな。馬のクソば、まんじゅうに見せてだますとが得意だった。彦一は、こやつばこらしめてやろうと、八代から鮎のコギリば持って行たて、ごちそうしたげな。スグルワラは、目ばこもうしてよろこんで、

「こぎゃんうまかつあはじめて食うた。どっからとって来たっかな。」

「八代にきてみなっせ、アバカンたい。」

スグルワラは、八代城のお堀に尻尾をつけて、一晩中霜夜にふるいあがったうえ、尾が凍りちいて、あぶにや殺される目に会うたげな。

## 第4話 彦一の負

---



彦一もわがカカドンにゃ一本まいとったげな。あしたは熊本まで歩いて行くという前の晩、出立ちのニゴリ酒ばそろっと買うち来て、戸棚に入れといた。カカが、ぜにはやらでにゃおって、酒ばかりいちくろうち・・・・・・・・・・とて、あくる朝、米のトギ汁とすりかえておいた。

顔も洗わでな、カカにわからんごつキュツと飲うで出かけた。もうこのへんではニゴリ酒のキキメが出んばんはずだが・・・・・・・・・・とクビばひねっても一向元気が出ん。そのうちに足がいんなえて来た。熊本へようようのこつでついた

。

「彦一、むごういんなえとるごたるが、また二日酔じゃなかつか。」

「なんの二日酔だろかい。酒やつにだまされとるごたる。」

## 第5話 ドジョウ汁

「彦一、ドジョウばうんとばかりもろうたけん、久しぶり集まって飯ば食おうや。」

と近所の仁が言うてきた。四、五人集まることになって、それぞれ醤油、砂糖、野菜というぐあいに持ちよった。彦一は生豆腐ば2丁持って行った。

「おらあドジョウはいらんけん、その汁の中にこの豆腐ば切らでん入れといてくれ。豆腐ばっかり食えばヨカ。」

そして、急用があるけん、後から来るというて出ていったげな。ドジョウ汁が煮えたってきた。さあもうよかろう、食おうか。となべのまわりによってフタばとって、ホケのホヤホヤする中から、ドジョウばすくおうとしたら一匹も見えん。

「わるがさきに食うたろ。」

と、大げんか。彦一が来て豆腐ばもろうちきやあもどったげな。ドジョウは煮られたあつさに、つめたか豆腐の中にもぐりこうでしもうとったげな。



とんち彦一ばなし

<http://yoshizumi02.jp/hikoichi/>

参考文献 (社) 八代青年会議所「ふるさと百話総全集」より

著者：吉住酸素工業株式会社

著者プロフィール：<http://yoshizumi02.jp/>